

指導計画の作成から実践、省察へ

—幼稚園の行事参加を通じたアクティブ・ラーニングの試み—

佐藤 千瀬

一. はじめに

本稿では、聖学院大学人間福祉学部児童学科の二〇一四年度「保育・教職実践演習（初等）（幼）」の一環として実施された、聖学院大学附属みどり幼稚園（以下、みどり幼稚園）における行事参加を通じたアクティブ・ラーニングの試みを明らかにすることを目的とする。具体的には、第一に学生とともにバザーに向けて、どのように授業を創り上げていったのか、その過程を明らかにする。第二に、アクティブ・ラーニングにおいて、担当教員がどのような役割を果たしたかを探る。第三に、アクティブ・ラーニングを通して、学生たちがどのような学びをしたのかを明らかにする。第四に、今後の課題を探る。

中央教育審議会（二〇一二）によると、「アクティブ・ラーニング」とは、「教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体

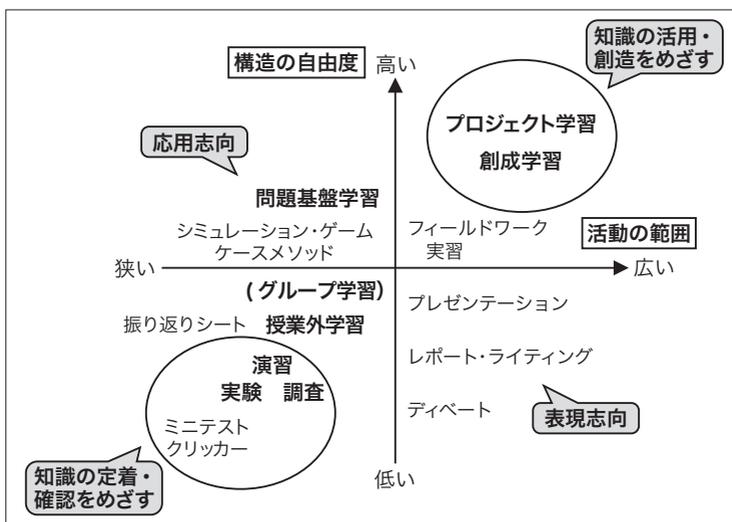


図1 アクティブ・ラーニングの多様な形態 (山地, 2014)

験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である」。

山地(二〇一四)は、アクティブ・ラーニングと総称される多様な形態を、「構造の自由度」と「活動の範囲」によって、図1のように整理している。そして、「第I象限と第II象限にあるものは比較的高度なアクティブ・ラーニング」としている。

本報告におけるアクティブ・ラーニング(幼稚園における行事参加)は、後述する通り、学生たちがこれまでの知識や経験等を活かしながら、バザーで担当するコーナーの内容を企画し、指導計画を立て、実践・省察するものである。構造の自由度が高く、活動の範囲が広いため、第I象限に位置づけられると考えられる。

次に、本授業の概要を記す。

二. 授業の概要

(一)「保育・教職実践演習(初等)(幼)」(二〇一四年度)の概要

「保育・教職実践演習(初等)(幼)」は、幼稚園教育・保育を中心に学んだ、幼稚園教諭一種免許状取得見込みの学生が、原則的に四年次秋学期に履修する必修科目である。二〇一四年度のシラバスによると、「大学四年間の学びと実習・実践を通して学んだことを総合的に学習することを目的とし、幼稚園教諭を目指す上で自己課題を明確にしている。不足している知識・技能については補完をし、卒業後に幼稚園教諭として従事する上で必要な資質や能力を高めていく」ことを学びの目標としている。その具体的な実践の場としてみどり幼稚園でのバザーに参加し、その中でいままさに身につけた保育技術や子どもに対する援助技術を確実なものとしていくことを目標としている。

二〇一四年度の授業計画では、一五回の授業の内、最初の五回(①九月二十五日、②一〇月二日、③一〇月九日、④一〇月一六日、⑤一〇月二三日)が行事参加の準備の時間として割り当てられた。なお、一回の授業は九〇分である。

履修者は、「幼稚園教育実習」を春学期に終えた学生または秋学期に実習予定の学生六五名である。この内、五名は一〇月一六日から幼稚園教育実習であったため、四回目の授業からバザー当日も含め参加できない状況であった。また、四名は就職活動のためバザー当日は参加できず、バザー当日に参加した学生は五六名であった。この行事に関する授業担当教員は一名であった。

なお、二〇一三年度から始まった「保育・教職実践演習(初等)(幼)」の授業の一環として、二〇一三年度もみどり

幼稚園でのバザーに学生が参加する予定であったが、バザー予定日に台風が直撃する影響で事前に延期が決定され、学生の参加は見送られた。そのため、二〇一四年度が、実際に学生がバザーに参加する初めての機会となった。

(二) 実践演習としての学生の役割

みどり幼稚園のバザーは、二〇一四年度は一〇月二五日(土) 一時から一四時に行われた。幼稚園や保護者が主催する模擬店等があり、みどり幼稚園の在園児だけでなく、そのきょうだいや保護者、卒園児、地域の方々等も参加する行事である。幼稚園との事前打ち合わせにより決まっていた、「保育・教職実践演習(初等)(幼)」として学生が担当する役割と内容は、大きく分けて以下の五つであった。

① 劇場コーナー

バザー内に劇場を作り、学生が準備した手遊び、パネルシアター、劇、ペープサート等を子どもに演じる。担当する学生によって三〇分単位のプログラムを作成し、入れ替え制とする。ただし、子どもたちの入退場の時間があるため、実際に演じる時間は一五分程度である。時間と回数、① 一 一時一五分、② 一 一時四五分、③ 一 二 時一五分、④ 一 二 時四五分、⑤ 一 三 時一五分、の五回である。各回とも定員は四〇名とする。

② 製作コーナー

製作二種類と必要な材料等を学生が考え、製作キットの下準備をする(各二二〇部)。製作キットを子どもに提供し、必要に応じて子どもを援助しながら一緒に作る。内容は、未就園児から小・中学生位までできるものを選択する。

③ゲームコーナー

ストラックアウト（大小二種類）ともう一種類ゲームを準備し、子どもに提供する。ゲームの方法や導入等については参加する学生たちに任せられている。ゲームに参加した子どもには景品を渡し、景品自体は幼稚園で準備する。未就園児から小・中学生位までできるよう、難易度等の工夫をする。

④託児保育

バザー時に託児が必要な子ども（小学生も含む）を一定時間預かり、子どもの希望にそって一緒にバザーを体験していく。託児担当は、学生の希望を考慮した上で、授業担当者が調整する。なお、当日まで準備が少なかったため、「製作コーナー」「劇場コーナー」「ゲームコーナー」のいずれかを兼務することで、準備を分担できるようにする。

⑤蔵出し

バザーでの蔵出しコーナーを保護者とともに担当する。当日までの準備期間は、「ゲームコーナー」を兼務する。

また、①②③については、一回百円で子どもたちは参加するため、材料・ディスプレイ等も含め、一人当たりの予算を超えないよう考え、準備するようにした。

(三) 担当教員の役割

担当教員の役割としては、以下の三点が挙げられる。

①幼稚園との連絡調整

担当教員自身が、みどり幼稚園のバザーもその準備の担当も初めてであったため、幼稚園のバザー担当者と事前打ち

合わせを秋学期授業開始前の九月五日に行った。授業開始後は、メールによる連絡や、幼稚園での打ち合わせを二回（二〇月一六日、一〇月二二日に）行い、細かな決定事項や変更点等を確認した。また、バザーで使用する保育室内外や園庭等の環境の確認、ゲームコーナーで使用するストラックアウトの実物の確認、使用できる物品の確認等のため、各コーナーのグループの代表者を引率して四回目（二〇月一六日）の授業後に幼稚園を訪問した。また、「託児保育」と「蔵出し」で必要となる学生の人数の確定後に、担当する学生のシフト表を作成し、幼稚園へ提出した。

②材料の購入と会計

バザーのために必要となる教材等は、幼稚園の会計から支出するため、その材料購入と会計を担当した。学生からの発案で内容と材料が決まるため、学生から事前に購入希望のあった画用紙やテープ・Pペーパー等、教員が事前に準備できるものは購入をし、会計用の「明細書」も教員が本授業用に作成した上で清算した。ただし、特定の物（製作で使用するシールや紙コップ・紙バッグ等）は学生自身が大きさや安全性、子どもの発達等を考慮して探し購入したため、教員が明細書を作成した上で、幼稚園に清算を依頼し、バザー後に学生に返金した。

③学生の指導

二〇一四年度は、幼稚園からは「ゲームコーナー」の「ストラックアウト」以外は内容に関する具体的な要望がなく、学生と内容を決めることとなった。本授業は、「いままで身につけた保育技術や子どもに対する援助技術を確実なものとしていくこと」を目標としているため、グループでの話し合いを通して学生自身で内容を決めていくこととし、各グループの進行状況を見ながら教員が助言をした。

また、幼稚園から連絡のあった決定事項や変更点を、授業時間外にも度々各グループのリーダーにメールで連絡をした。逆に、幼稚園に確認が必要なことをグループごとに出してもらい、教員がまとめた上で幼稚園の担当者に確認をした。なお、学生同士は「保育・教職実践演習（初等）（幼）」以外の授業で会うことが少ないため、グループごとに

LINEやメールで連絡を取り合う形とし、全員に連絡が伝わるようにした。

三、授業の実際

授業開始から一ヶ月後にバザーがあり、週一回の授業で五回しか授業内での準備時間がないことから、学生の進捗状況等を見て計画を修正しつつ、表1のように授業を進めた。

一回目（九月二五日）の授業では、教員がバザー参加についてのガイダンスを行った上で、学生自身が何をしたいかを考えられる時間を設けた。その上で、学生が挙手をし、学生の希望にそって各コーナーの担当に分かれた。さらに、学生同士の話し合いにより、「劇場コーナー」内で五つのグループ、「製作コーナー」「ゲームコーナー」でそれぞれ二つのグループに分かれ、各グループのリーダー役（教員やグループメンバーとの連絡係）を決めた。そして、グループごとに製作・ゲーム・劇場の内容を考える時間を設けた。また、「託児保育」「蔵出し」担当の希望者を確認した。なお、「蔵出し」希望の学生四名は、ゲームの準備を担当した。そして、次週には、各グループの内容を決定するため、それまでに各グループで何をするか決め、必要な材料・本等を準備することとなった。

各コーナーにより授業内容が変わるため、以下はコーナーごとにどのような活動と指導を行ったかを具体的に記す。本稿では特に「劇場コーナー」「製作コーナー」「ゲームコーナー」に焦点を当て、アクティブ・ラーニングの実際を明らかにする。

	劇場コーナー	製作コーナー	ゲームコーナー	託児保育	蔵出し
①9/25	5つのグループと発表順番決め。各発表内容を考える。	2つのグループ決め。各製作内容を考える。	2つのグループ決め。各ゲーム内容を考える。	「劇場」「製作」「ゲーム」に所属。「託児保育」「蔵出し」希望の確認。	
②10/2	発表内容、役割分担等の決定。材料を準備し、必要な教材等の作成。	製作の候補の実物を持参。グループごとに内容を決定。次週の下準備・資料作成。	ゲーム内容、方法、役割分担等の決定。ゲームで必要な教材等の作成。	所属したグループ内での作業。	
③10/9	全員で製作キットの作成。(2グループ分・各220部)				
④10/16	指導計画の作成。各グループの準備。				
	授業後:担当教員と共に、各グループの代表者が、幼稚園に下見・確認。				
⑤10/23	指導計画の提出(授業開始時)→指導計画の指導・返却(10/24朝) 各コーナーの会計担当者決め。				
	模擬保育(隣の教室):劇場担当全員の前で各グループが発表。改善点等を議論する。	教材等の準備。		所属したグループ内での作業。	
前日 10/24 (10:00 ～ 14:30)	10:00～環境設定 11:00～13:00 模擬保育 13:00～グループごとの準備。	10:00～環境設定 製作キットの下準備。 模擬保育	10:00～環境設定 13:00～14:30 模擬保育 グループごとの準備。	所属したグループ内での作業。	保護者と蔵出し作業。
	幼稚園での環境設定・リハーサルを踏まえた上で、指導計画の修正・再提出。(10/24午後)				
10/25 当日	8:30～グループごとに幼稚園で準備可。(8:40～劇 模擬保育) 9:00全員集合・準備 10:00～全体打ち合わせ 11:00～14:00バザー 14:00～片付け				

表1 2014年度「保育・教職実践演習」(初等)(幼)授業計画

(一)「劇場コーナー」のアクティブ・ラーニング

1. 第二回(九月二五日)

「劇場コーナー」を希望する学生が二六名と担当教員の予想以上に多かつたため、個人発表ではなくグループ発表の形にした。「劇場コーナー」については、五つの発表時間帯があつたため、バザー当日の発表順番も学生同士の話し合いにより決めた。

2. 第二回(一〇月二日)

劇場コーナーに来る子どもたちは、未就園児から小学生位と年齢層が幅広いため、どの年齢でも楽しめるような内容と方法を、グループごとの話し合いを通して決めていった。学生がこれまでの実習に向けて準備していた教材は、三〇〜三五名程度を想定していたが、定員が四〇名であり、グループ発表となつたため、大きめの教材を一から作ることもなつた。また、上演前に行う手遊びについても、教材との関連を含めて検討していった。その結果、各グループの内容等は以下のように決定した。

- グループA(一一時一五分から上演) パネルシアター「ともだちほしいな おおかみくん」(担当学生四名)
- グループB(一一時四五分から上演) ペープサート「三びきのこぶた」(四名)
- グループC(一二時一五分から上演) パネルシアター「おむすびころりん」(七名)
- グループD(一二時四五分から上演) パネルシアター「まほうのつえ」(四名)
- グループE(一三時一五分から上演) 劇「ぐるんぱのようちえん」(七名)

なお、「まほうのつえ」と「ぐるんぱのようちえん」については、三年次の「表現A」（相川徳孝先生担当）で既習の内容であり、新たなグループのメンバーで教材等を改善し、作り上げることとなった。

3. 第三回（二〇月九日）

三回目の授業では、クラス全員で製作コーナーの製作キットの作成を行った。

4. 第四回（二〇月一六日）

四回目の授業では、各グループで指導計画の内容と、幼稚園での下見の際に確認すべき点を話し合った。そして、授業後に、教員と共に、各コーナーの代表者一〜二名ずつが、幼稚園に下見に行き、保育室内外・園庭の環境や保育室の椅子等の実物を確認した。また、保育室外の壁画装飾や看板の位置・個数、出入口の位置等の動線を確認し、装飾や発表の際に用いて良い物（養生テープ、画鋏）等を幼稚園の担当者に確認した。また、学生がメジャーを持参し、必要となる物の大きさ・長さ等の確認をした。

下見で確認した環境をもとに、学生たちがAとEのグループごとの指導計画と、「劇場コーナー」全体の指導計画を作成した。「劇場コーナー」は、図2の通り二階の保育室一室を使用し、二階の廊下から保育室に入室する子どもと、外階段を通ってテラスから入室する子どもがいる。そのため、廊下側とテラス側の二ヶ所に、チケットや現金を受け取る「受付係」と席への「誘導係」が必要となり、自分のグループの発表時間以外は、それらの役割分担を三〇分ごとに入れ替わる必要があった。また、託児保育担当の学生や、必要に応じて製作コーナーの補助を担当する学生もおり、「劇場コーナー」全体の動きや役割分担、環境構成、安全管理等の共通認識を持つため、「劇場コーナー」全体の指導計画が必要とされた。

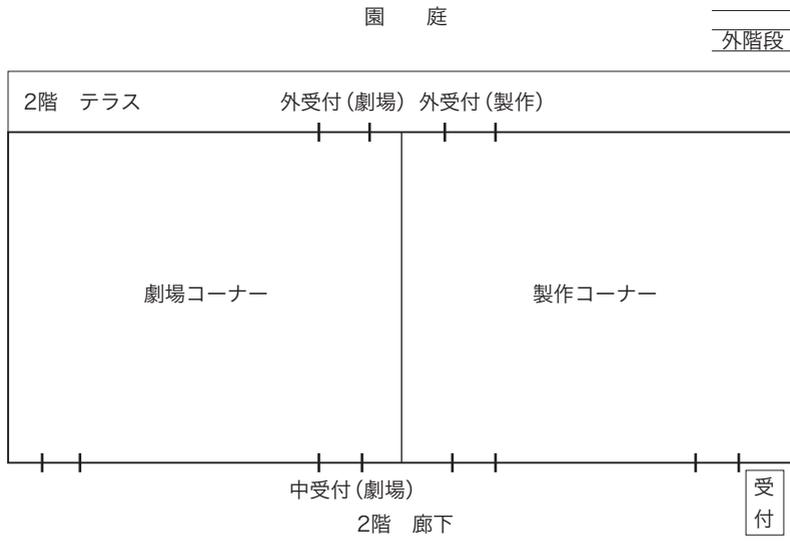


図2 保育室の環境

指導計画作成においては、以下の二点に留意をするよう教員が指導をした。第一に、「幼稚園教育要領」の領域「表現」のねらい「(九) 絵本や物語などに親しみ、興味をもって聞き、想像を愉しむ楽しさを味わう」ことを踏まえ、具体的なねらい及び内容と必要な援助を考えることである。第二に、環境構成では、子どもたちの動線を考え安全に留意しながら、舞台や椅子の位置、受付の位置、誘導者の立ち位置、看板等の位置を考えることである。実際には学生たちと担当教員とで幼稚園の下見の際に相談して決めていった。また、看板等については、「幼稚園教育要領」の領域「言葉」のねらい「(九) 日常生活の中で簡単な標識や文字などに関心をもつ」ことと関わり、文字が読めない発達段階の子どもでも何をする場なのか分かるよう配慮することを助言した。これらの指導計画は、ICTを活用して学生たちがパソコンで作成し、コーナー担当の学生全員が共有できるようにした。

5. 第五回（一〇月二三日）

授業開始時に、学生が各グループと「劇場コーナー」全体の完成した指導計画を提出し、それらの指導計画に基づいた各グループの模擬保育を行った。授業で使用している教室の隣の教室を予約・使用し、「劇場コーナー」担当の学生全員の前で、各グループが発表し、良かった点や改善点等をまず学生同士で話し合う形にした。例えば、パネルシアター「おむすびころりん」の発表で、「おむすび」が転がる動きをした後、学生がパネルの後ろに「おむすび」を隠していたのを見て、他のグループの学生が、背景のネルに穴の絵をしたポケットを縫い付け、本当に穴に落ちたようにおむすびをポケットに入れることを提案していた。また、よくばりなおじいさんがねずみの穴の中で「にゃーっ」と猫の鳴き真似をした瞬間にパッと暗くなり、何も見えなくなつて迷つていろうちにもぐらになつてしまつた、という場面があつた。その際、ナレーターの言葉しかなく、パネルシアターは白いままであつたため、白いパネルの上からパッと黒い布を全体的にかぶせ、おじいさんの目だけ黒い布に縫い付けて「見えない」ことを表現したらどうか、その目の上からもぐらになつたおじいさんの絵を重ねたらどうか、等の意見が学生間で出された。このように、模擬保育で学生同士が意見を出し合うことで、グループ内では思いつかなかつたようなアイデアが出て、各グループが何をどのように修正すれば良いのかが明確になつた。また、実際に子どもたちの前で演じるという期待感と、お金を頂いて演じるという緊張感から、学生たちは非常に真剣で、活発な意見が出た。担当教員からは、学生同士の話し合いでは出なかつた点について助言したり、改善案を学生たちに問いかけた。また、個々の学生の改善点については、模擬保育後に個別に声の大きさや演じ方等について助言をした。

この授業内での発表の際に準備が不十分だつたグループについては、学生も教員も授業がなかつた五限後にもう一度、担当教員の研究室で模擬保育を行った。その際、授業時間外ではあつたが、別のグループの学生たちが協力し、高

校時代に演劇部だった学生たちが、担当教員が気付かなかったような身体の動きや立ち位置等について専門的な助言をし、教員も学生たちも一緒に改善案を考える機会となった。

6. 前日準備（一〇月二四日）

バザー前日は、子どもたちは遠足に行っており、幼稚園の職員や保護者と一緒にみどり幼稚園にて一〇時から一四時半までバザーの前日準備を行った。

朝、担当教員が添削済みの指導計画を各グループに返却した後、まず、一〇時からコーナーごとに環境設定を行った。予め幼稚園に申請をしていた個数のテーブル・椅子等を各コーナーに配置した後、看板等の設置を行った。例えば、バザー当日に子どもたちが園舎内の階段を上がってすぐに目のつく場所に、「おにいさん おねえさん げきじょう」という看板をかけた。看板については、文字が読めない子どもたちでも分かるように、イラスト等を加える工夫を教員から助言をした。また、「劇場コーナー」で使用する保育室内外の壁面にも学生たち自身で考え準備した秋の装飾をし、舞台や椅子を設置した。担当教員からは、子どもたちが園庭から園舎の二階を見上げた時に、何を行っている部屋か分かるようにするよう助言をし、テラスの窓にも装飾をした。

一一時からは、当日と同じ時間帯に実際の保育室の舞台で各グループが一五分間の手遊びとパネルシアター等の模擬保育を行った。そして、発表グループ以外の学生は、実際の子ども用の椅子に座り、各グループの発表後に良かった点・改善点を話し合った。また、受付（会計）や誘導係も当日と同じように動くことにより、配慮する点等を改めて考えた。当日と同じ時間帯にリハーサルをした結果、日光による反射を防ぐため、開演直前に窓側と廊下側のカーテンを閉める等の配慮点が浮かび上がった。また、実際の子どもの用の椅子に座って舞台を見ることで、端の席からは舞台裏が見えてしまうこと、ペープサートの舞台を大きくする必要性等、新たな課題が浮かび上がった。これらの課題を踏ま

7. バザー当日

当日は、一時からバザーを開始したが、子どもたちの多くはまず目に入る園庭の模擬店に行く姿が見られ、園舎の

え、朝返却した指導計画を再度グループで修正加筆し、提出するよう指導をした。

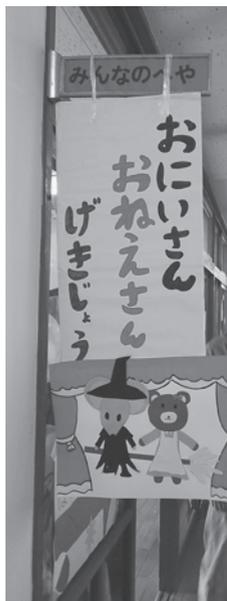


写真1 劇場コーナーの環境設定
(保育室の壁画装飾・看板)

二階で一時一五分から始まる一つ目の公演に来た親子は少ない状況であった。その状況を見た学生たちは焦り、「ピラを配ってもいいですか？」等の声が学生から上がった。そのため、担当教員が子どもたちの発達段階を示唆したところ、二つ目の公演が始まる少し前に、二階のテラスの窓から園庭に向かって声を揃えて案内をしたり、学生が劇の衣装を着て園庭を周り、子どもたちに声をかけたりする等、自分たちで考え行動をしていた。また、子どもたちに呼びかけをした結果、今度は早くから劇場コーナーに人が集まり、待ち時間が長くなってしまった。そのため、担当教員が学生に示唆したところ、子どもたちが開演時間まで楽しく待つていられるよう、急遽学生の一人が前に出て、予定にはなかった手遊びをしていた。そして、開演時間になり、予めグループで準備をしていた手遊びを二回繰り返し返そうとしたところ、子どもたちから「もう見たい」との声が挙がったため、子どもの反応に応じてすぐにパネルシアターを始めていた。このように、当日の子どもの姿に応じて臨機応変に行動することを学生たちは学んでいた。

(二)「製作コーナー」のアクティブ・ラーニング

1. 第二回（九月二十五日）

製作コーナーは、一五名の学生が希望し、二つのグループを決め、製作内容を検討することから始まった。それぞれの実習経験等をもとに、どの年齢の子どもでも楽しめることを前提に話し合いを進めていた。

2. 第二回（一〇月二日）

グループごとに学生たちが製作物の候補の実物を持参し検討した結果、「作ってバザーですぐに使えるもの」「作って遊べるもの」という理由から、各グループの内容は次のように決定した。

製作①「オリジナルバッグをつくろう」(担当学生八名)

製作②「くるくるかざぐるまをつくろう(紙コップ風車)」(七名)

次週にクラス全体で製作キットの下準備をするため、必要な教材の準備と、作り方等が書かれた配布資料の作成を行った。オリジナルバッグについては、見本が薄いビニール袋であったため、厚手のものにするよう、指導教員が助言をした。また、バッグの飾りは未就園児等が誤飲しないよう、安全面や発達に応じた大きさに留意するよう指導をした。

3. 第三回(二〇月九日)

前年度のバザー担当教員からの助言を踏まえ、製作コーナー担当の学生だけでは製作キットを二二〇部作成することが困難なため、クラス全員で作業する時間を設けた。製作の各グループの代表が最初に作業内容をクラス全体に向けて説明をした。学生たちは、一人で複数の作業をするのではなく、数人でグループを作り作業を分担することで、効率良く作業を進められることを見出していた。

4. 第四回(二〇月一六日)

製作コーナーについても、各グループの指導計画とともに、製作コーナー全体の指導計画を作成するよう指導をした。特に製作コーナーの指導計画については、「幼稚園教育要領」の領域「表現」のねらいや内容(七)かいたり、つくったりすることを楽しみ、遊びに使ったり、飾ったりなどする」等を踏まえ、指導計画を立案した。また、はさみの使用が許可されていたため、安全への配慮についてよく考えるよう助言をした。

製作コーナーの学生たちは、幼稚園の下見の際に製作の見本を持参し、幼稚園の担当者に確認をした。幼稚園側から

は、製作物の飾りと壊れやすさについて指摘と相談があった。幼稚園からの指摘と、児童学科の教員からの助言を受け、授業時間外に学生と担当教員で話し合い、「オリジナルバッグ」については二点再検討をした。第一に、より強度の強いビニール袋を学生と担当教員で探した。その結果、強度が強くて子どもが持ちやすい大きさのビニール袋が見つからなかったため、紙バッグを二枚重ねてバッグを作ることを学生たちが考えた。第二に、飾りの大きさ・種類・内容を再検討した。飾りの大きさについては、未就園児でも貼ることができる大きさのシールの見本を担当教員が示し、もう一度市販のシール等の飾りを学生たちと探した結果、子どもが使いやすい大きさのものをあまり見つけられなかったため、飾り自体を作ることとした。その際、発達差や製作経験の個人差を踏まえ、絵を描くことが苦手な子ども等でも色塗りや切り貼りを行うことで楽しんで作ることのできる内容を再検討した。また、男児でも女児でも楽しめる飾りを考えるよう助言をした。飾りの内容は学生たちで考え、①まだ絵を描けない子については、折り紙（ハートや花）や絵をのりで貼るだけのできる飾り、②色塗りができる子には自分で色塗りのできる絵（乗り物や動物等）、③はさみを使える子どもには絵等を切り抜くことのできる飾り、④自分で絵を描いたり飾りを作りたい子どもには、自由に飾りを作るための材料を準備することが決まった。

また、「紙コップ風車」グループについては、風車の教材研究をすることを指導した。具体的には、紙コップの大きさ、ストローの長さ・太さ等を研究し、強度の強いものを再度考えるように助言をした。学生たちは、大中小様々な大きさの紙コップを使って風車を作り、実際に外で走ったりしながら羽の向きや強度等の研究をした。

これらの改善した製作物の見本を再度担当教員が幼稚園に持参し、幼稚園側に飾りの大きさ・強度等を再度確認し、助言を頂いた。

5. 第五回（一〇月三日）

五回目の授業では、新たに必要となった教材等の準備を各グループで進めた。



写真2 オリジナルバッグの飾り、見本、環境設定

6. 前日準備（一〇月二四日）

製作コーナーの環境設定については、子どもたちがでんぶんのりの使用後に手洗いをする可能性があるため、水道の

位置を含めた動線を考え、どのように保育室を二分するかを検討した。また、製作コーナーが混雑した際、親子がどこにどのように並んで順番を待つのか、ばらばらに来る子どもたちに対してどのように製作の手順の説明をするのか、留意する点を考えるよう指導をした。そして、学生同士で実際に受付から保育室内に誘導する練習や、製作の手順の説明をする練習を行い、改善点を考えた。

環境設定については、製作の際に子どもたちがペン等で幼稚園のテーブルを汚さないよう、学生が透明のゴミ袋を持ち、袋を開いてテーブルの上からかけ留めるように配慮をしていた。また、安全面を考え、はさみを柵の上に置く等、素材や用具を置く位置なども検討した後、必要な教材の下準備を進めていた。

7. バザー当日

バザー当日は、開始直後から小学生の女兒たちが製作コーナーでオリジナルバッグを作ることを楽しんでおり、バ

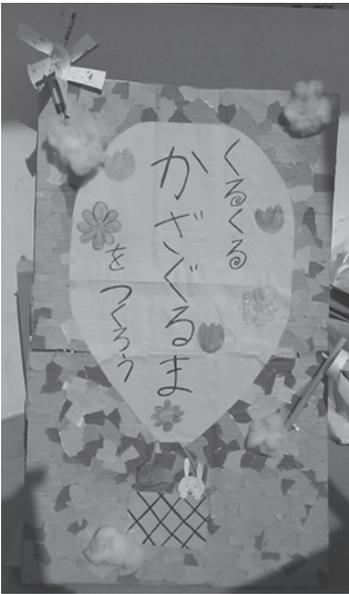


写真3 製作コーナーの環境設定
(看板、受付)

ザーで購入したものをバッグに入れる子どもたちの姿も見られた。子どもは親子で製作コーナーに来ることが多かったため、保護者の協力を得ながら必要に応じて援助をし、安全に配慮をしていた。学生たちは、ある程度の年齢ごとにテーブルを分けて説明する予定だったが、実際には家族単位で来て、きょうだいで一緒に同じ席についたため、発達差に配慮しながら説明をする等、臨機応変な援助が必要となった。また、風車を作った後、製作コーナーや廊下で走って試そうとする子どもの姿が複数見られたため、どこで遊ぶようにするのか、安全に配慮するよう担当教員から学生に助言をした。製作コーナーは、学生たちは全く休憩が取れない程に賑わっていた。

(三) 「ゲームコーナー」のアクティブ・ラーニング

1. 第二回（九月二十五日）

ゲームコーナーは二つの活動を提供することになっていたが、その一つについては事前の打ち合わせで幼稚園側から要望があり、毎年みどり幼稚園の子どもたちが楽しみにしている「ストラックアウト」を行うことが決まっていた。しかし、もう一つについては、内容を決めることから学生に任されていた。そのため、ゲームコーナー内で二つのグループに分かれ、未就園児から小学生まで、難易度を変えることによつて楽しめるような、もう一つの活動を検討することから始まった。

2. 第二回（一〇月二日）

二回目の授業では、以下のように決定した。

ゲーム①「ストラックアウト」大小二種類（担当学生八名）

ゲーム②「わなげ」二種類（担当学生一〇名。内、当日参加八名）

看板・教材等準備（担当学生六名。内、当日蔵出し四名、当日実習のため不参加二名）

3. 第三回（一〇月九日）

三回目の授業では、クラス全員で製作コーナーの製作キットの作成を行った。

4. 第四回（一〇月一六日）

ゲームコーナーについても、各グループの指導計画とともに、ゲームコーナー全体の指導計画を作成するよう指導をした。ゲームコーナーの指導計画については、「幼稚園教育要領」の領域「健康」のねらい「(二) いろいろな遊びの中で十分に体を動かす」「(四) 様々な活動に親しみ、楽しんで取り組む」及び内容「(二) 様々な遊びの中で、幼児が興味や関心、能力に応じて全身を使って活動することにより、体を動かす楽しさを味わい、安全についての構えを身に付け、自分の体を大切にしようとする気持ちがあふくようにすること」等を踏まえて、指導計画を立案した。特に、ゲームコーナーでは、発達差に応じた援助及び怪我や危険のないよう安全に関する留意点についてよく検討することを助言した。

幼稚園の下見では、晴天時には園庭、雨天時にはテラスを使うことが伝えられ、それぞれの位置で行うのかを確認した。その際、園庭には他の模擬店もあることから、子どもたちの並ぶ位置や地面の起伏等の状態等についても確認をした。また、大小二種類あるストラックアウトの実物を確認した。

5. 第五回（一〇月二三日）

五回目の授業では、必要となる教材や看板等を検討し、作成した。例えば、わなげグループは、子どもの手の大きさや輪の投げやすさ・重さを考慮しながら、わなげの輪を新聞紙とビニールテープを用いて作っていた。また、わなげの土台に傾斜をつけることで、子どもにとって遊びやすくなるのではないかと教材研究をしていた。わなげの土台は、段ボールとペットボトルを使って作ることにしており、その作業を進めていた。また、ストラックアウトについては、看板などを作成していた。教員からは、わなげやストラックアウトで子どもの立ち位置の目印をどのようにするのか、発達にに応じてどの程度の間隔にするのか等、安全面を考慮し、具体的に考えるよう助言をした。その結果、地面に石灰で印をつけるとすぐに消えてしまうため、ペットボトルとスズランテープを用いて目印を作り、子どもたちが引つかかっただけで転ばないように、高さや色等の安全面での配慮を考えていた。

6. 前日準備（一〇月二四日）

ゲームコーナーについては、前日準備の朝に各ゲームコーナー用のテントと周囲の模擬店のテントを設置し、初めて具体的な位置と広さ・高さ等の確認と環境設定ができた。その上で、午後からゲームコーナーの模擬保育を行った。例えば、ストラックアウトグループの模擬保育の際には、わなげグループの学生たちが親子役となり、実演をした。その結果、検討する課題が三点浮かび上がった。一つ目は、大小あるストラックアウトのどちらかを受付時に子どもが選択するが、実際に誰かがストラックアウトを行っているとき、受付の位置からは実際のストラックアウトが見えず、子どもにとって選択しづらいことである。この解決策として、受付にストラックアウトのイラストを準備し、子どもたちに示すことを助言した。二つ目は、受付終了後に、どのように並ぶ位置まで移動するのか、その誘導が分かりづらいこと

と、誘導の人手が足りないことである。そのため、学生の配置の見直しや、移動を分かりやすくするための環境設定の工夫を助言した。三つ目は、ストラックアウトの順番を待つ際に子どもたちが並ぶ位置である。実際にバザーが行われる時間帯に学生たちが園庭に並ぶと、学生たちが考えていた場所では直射日光を長時間浴びることが分かったため、安全のため木陰等で待てるよう助言をした。模擬保育を通して浮かび上がった課題を改善するため、指導計画を修正し、必要となる教材を新たに作成していた。

また、室内の物を屋外で使用する際の衛生管理と片付けについても指導をした。具体的には、普段保育室内にある椅子等を使用するため、予め椅子の脚をビニールで包み汚れないようにする工夫や、バザー後に保育室に返却する前に椅子等を拭くための新しい雑巾の準備等について助言をした。

安全管理については、学生たちで検討しており、ストラックアウトのボールが外に飛ばないように、テントの周囲をビニール幕で覆うなどの工夫をしていた。

7. バザー当日

ゲームコーナーの人的環境として、スポーツの楽しい雰囲気を作り出すために、学生たちは白いTシャツの上に揃いのゼッケンを着用していた。そして、子どもたちが楽しく取り組めるよう、言葉がけや応援を工夫することで、非常に多くの子どもたちがゲームに参加をしていた。

四、アクティブ・ラーニングを通した学生の学び

以上の活動を通して、学生たちは以下の六点を学ぶことができたのではないだろうか。

第一に、「ねらい↓計画↓実践↓記録↓省察」のサイクルの実際を学んだことである。今回のバザー準備では、内容を企画することから始まり、「幼稚園教育要領」の五領域と子ども達の発達に基づくねらいを立て、指導計画を立案し、模擬保育を踏まえて実際に幼稚園で子どもに活動を提供する実践を行った。その過程の中で、例えば「劇場グループ」は、大学の教室内での模擬保育の省察から指導計画を修正し、さらにバザー前日の幼稚園の保育室での模擬保育の省察から指導計画を再修正し、バザー当日の親子の前での実践につなげていた。

また、このサイクルを支えるために、後述する通り「個人シート」に個々の学生が何をどのように考え準備を進めたのか、そして実践を通して浮かび上がった課題は何かを、記録として残していた。このように、実践するだけでなく、上記のサイクルを実感できるように授業を進めたため、学生自身の省察が具体的であり、各自の今後の課題が明確になったのではないかと考えられる。

第二に、協働と同僚性の実際を学んだことである。「同僚性」とは、同僚間で協力し合いながら教育目標や実践について議論したり、指導について反省したり評価し合うことを通して、より良い教師集団となることであり、個々の教師が専門的な力量を形成していくことにつながる。今回の授業では、各グループの話し合いを中心に活動を進めた。また、「劇場コーナー」等コーナーごとに模擬保育を行い、話し合いにより改善点とその方法を検討し、修正をしていた。「協働」と「同僚性」については、一年次の「教師論」の授業で概念として学んでいるが、その実際に四年度にバ

ザーでの経験を通して学ぶこととなった。その学びに気付くことができるよう、バザー後の集まりにおいて教員からもう一度「協働」と「同僚性」について話をしたため、概念理解だけでなく実感を伴って学ぶことができたのではないかと考えられる。

第三に、環境構成と安全管理の実際を学んだことである。今回は、各コーナーの保育室や園庭の環境構成が全て学生に委ねられていたことから、子どもたちの動線を考慮した物の配置や、安全性と季節・発達を考えた壁画装飾等を、学生たち自身で全て考える貴重な機会となった。そのため、例えば「劇場コーナー」の学生から天井に風船を飾りたい、という要望が挙がった際、最初から教員が止めてしまうのではなく、幼稚園の許可を得て画鋏や養生テープで実際に風船を止め様子を見ることによって、すぐに風船が落ちてきて危険であると判断することができた。このように、例えば壁画装飾等をする際には、何を用いて良いか、安全性を含めて考えることができたと考えられる。

第四に、家庭や地域との連携の実際を学んだことである。今回の幼稚園のバザーでは、保護者が中心となって模擬店等を行い、幼稚園の教職員と協力して子どもたちが楽しめるよう準備を進めている姿を、バザーの前日準備から当日の片付けまでを含めて見て学ぶことができた。また、卒園生を含めた地域の人々も参加をしている様子を実際に見ることができた。中でも、「蔵出しコーナー」担当の学生は、保護者に指示を頂きながらバザーで販売する物品の蔵出し等を一緒に行ったため、経験を通して保護者との連携を学ぶことができたのではないかと思われる。

第五に、幼稚園における行事の準備と意味を学んだことである。今回、一つの行事を作り上げるために必要な準備から片付けまでを、一部ではあるが、学生たちは経験を通して学ぶことができた。そして、学生自身で企画することを通して、一つの行事に向けてどのような事前準備が必要で、それぞれの位の時間が必要となるのか、それらを逆算して見通しを持って準備をする必要性を学ぶことができたのではないだろうか。また、通常の保育とは異なり、在園児だけでなく、様々な年齢の子どもに対し、どのような配慮や援助が必要となるかを考える機会となった。さらに、家庭や地

域との連携も含めて、一つの行事にどのような意味があるのかを考える機会となったのではないだろうか。

最後に、これまでの大学での学びや実習経験、学生自身の経験の全てを活かした学びができたことである。例えば、実習経験に関しては、二〇一四年度に「保育・教職実践演習（初等）（幼）」を履修した学生は、原則的に二次次に聖学院大学附属みどり幼稚園で観察実習を経験していた。そのため、バザーの片付けの際、基礎実習でどのように掃除をしていたか等を思い出し、テラスも含め主体的に掃除を行っていた。また、大学での学びや実習経験以外にも、学生個人のこれまでのボランティアやアルバイト、部活や委員会等での経験を通して獲得してきた力を発揮しながら学んでいた。例として、各コーナーでチケットや現金を頂くため、間違いないよう会計用の用紙を学生自ら作成し、集計しやすい工夫をしていた。また、親子の誘導、劇場コーナーの台本の作成、演劇の助言、シフト表の作成、グループをまとめる力などは、これまでの学生自身の人生経験が活かされ、まさにアクティブ・ラーニングが目指す「認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成」そのものであると感じられた。

五. アクティブ・ラーニングにおける指導と今後の課題

次に、今回のアクティブ・ラーニングにおいて担当教員が工夫した点、学んだ点、今後の課題について述べる。

(一) 担当教員が工夫をした点

本授業において、担当教員が工夫をした点は、以下の三点である。

第一に、学生自身の話し合いを通して準備を進めたことである。四年次の最終的な仕上げとなる科目であることと、幼稚園から内容を任されたことを考慮し、ゲームや製作等の内容を教員側で決めて準備するのではなく、学生自身で企画するようにした。その結果、学生自身の意欲が高まり、話し合いも非常に活発に行われた。

第二に、グループごとに指導計画をパソコンで作成したことである。指導計画は、①コーナーごと（劇場・製作・ゲーム）のものと、②各グループのもの二種類を作成することとした。その理由は、一つの保育室を劇場五グループ、もう一つの保育室を製作二グループ、園庭をゲーム二グループで共有するためである。各グループの具体的な手順とともに、コーナー全体として、誘導等の役割分担やシフト、環境構成と安全管理等、話し合いを通して考え、共通認識を持つために行った。また、学生自身で予め大まかに指導計画を立てた上で幼稚園を下見したため、環境構成や使用できる物等、何を下見で確認すべきかが明確になった。下見後には、具体的な環境構成を入れた上で、コーナーとグループごとに詳細な指導計画を立案した。なお、指導計画の作成の際には、今後の現場を考え、パソコンで指導計画を作成することとし、コーナー担当の学生全員が指導計画を共有するようにした。これらの指導計画を作成した結果、子どもの実態とのずれや課題等が明確になった。

第三に、「個人シート」を活用したことである。「個人シート」には、一回目の授業を含め、授業時間内外で個人やグループのメンバーと準備したこと・活動内容・作成したものを学生自身で具体的に毎回記入できるようにした。そして、バザー後には、「個人シート」の裏面にある「バザー当日の役割・活動内容・考察・反省点」欄に、「これまでの行事の準備と当日の動き、子どもとのかかわり方、指導計画、幼稚園の行事における安全管理等」を踏まえて省察したことを記録し、提出することとした。「個人シート」を導入した理由は、授業時間外での準備時間が多くなることが予想されたため、教員の見えないところで、各学生が努力したことを記録として残すとともに、授業担当者が各学生のアクティブ・ラーニングを公平に評価するためである。その結果、授業内に教員が気付かなかった個々の学生の努力が明確

になった。

第四に、模擬保育を行った上で、実践に結び付けた点である。実際の子どもを対象とするため、大学の教室内と実際の保育の場で模擬保育を行い、何度も省察と改善を重ねた上で実践できるようにした。

(二) 担当教員が学んだ点

次に、本授業のアクティブ・ラーニングを通して、教員自身が学んだ点を述べる。

第一に、担当教員自身も、幼稚園で行われるバザーで、どのような準備が必要となるのかを、一部ではあるが体験を通して具体的に学び、教師の役割と職責を学ぶ機会となった。

第二に、普段の講義型の授業だけでは見られない積極的な姿や、これまでの経験を活かし働く姿等、学生の多様な面に新たに気付いたことである。

第三に、最大の反省点につながるが、製作コーナー担当学生への指導法である。第二回の授業で、学生に口頭で助言はしていたが不十分であった。そのため、製作の見本を授業外で担当教員が再度確認し指導した上で、修正した見本を幼稚園に確認し、その後全員で授業内に製作キットを作成する手順にし、そのための日程調整と指導を予め綿密にしておけば良かったと反省している。また、二週間という短い期間であったとはいえ、各製作グループで教材研究を十分にした上で、素材を決めることをより丁寧に伝えておけば良かった。今回は、学生が幼稚園に製作の見本を持参した後、幼稚園側より壊れやすいことや飾りが小さいことの指摘を受け、改善案について児童学科教員の指導や助言も頂いた。その後、担当教員と学生で再度素材を研究し、ビニールバッグから二重の紙バッグへの変更、紙コップの大きさの変更等をし、再度幼稚園にも製作の見本の確認をしたため、学生にも幼稚園側にも負担をかけることになってしまった。幼

稚園側からの指摘を受けた後は、学生の教材研究に対する姿勢も大きく変わり、大学で数種類の紙コップを使って何度も風車を回して研究したり、紙バッグの装飾に使う手作りのものを考え増やしたりしていたが、最初から教材研究に向けた指導がより必要であった。

(11) 今後の課題

よりアクティブ・ラーニングの質を高めるための今後の課題として二点挙げられる。

第一に、授業内での準備時間をより多く設けることである。幼稚園等を希望する学生にとっては、九月後半から一〇月下旬頃は最も就職活動が盛んになり大変な時期であったが、試験勉強等と並行してバザーの準備をよく行っていた。ただ、授業内でのコマ数が少なく、授業時間外での準備が多くなるため、学生は就職活動とも重なり、なかなかグループのメンバー全員で集まることが難しい状況であった。「保育・教職実践演習（初等）（幼）」のコマとして、二〇一四年度は木曜二限と木曜三限が設定されていたため、（担当教員は別の授業があり木曜二限を担当できなかったが、）二限をグループでの活動時間として設定すれば、授業内でよりきめ細やかな指導や準備ができ、全員が参加しやすく、よりアクティブ・ラーニングの質を高められたのではないかと考えられる。

第二に、当日参加できない学生の役割分担の見直しである。教育実習等が重なる学生は、製作グループの一名以外は、準備に費やした時間も、アクティブ・ラーニングを通して学んだことも、他の学生に比べて圧倒的に少ないことが、「個人シート」を通して明確になり、課題として浮かび上がった。バザー当日に参加できない学生は、より下準備を必要とする製作グループを担当し、下準備や話し合いで、より積極的に参加できるようにすることが、今後の課題である。

今回のアクティブ・ラーニングの試みは、課題や反省点は残るものの、学生にとっては、四年次の幼稚園教育実習でそれぞれの今後の課題となった点をもう一度振り返り、バザー参加を通してその課題を克服し、新たな課題を見出していくことができたため、「保育・教職実践演習」の学びの目標を達成する上で非常に貴重な経験になったのではないかと考えられる。

引用文献

中央教育審議会「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて——生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ——（答申）（平成二十四年八月二十八日）用語集」（文部科学省、二〇二二年）、三七頁。

文部科学省『幼稚園教育要領』（二〇〇八年）

山地弘起「アクティブ・ラーニングとはなにか」『大学教育と情報』No.1 一四六号（私立大学情報教育協会、二〇一四年）、二一七頁。

謝辞

二〇一四年度の「保育・教職実践演習（初等）（幼）」の一環として、学生たちがバザーに参加する機会を下さり、様々な調整やご助言をして下さいました、聖学院大学附属みどり幼稚園の教職員の皆様にご心より感謝を申し上げます。また、バザー当日に学生たちの提供する活動を楽しんで下さった子どもたちと、温かく見守って下さいました保護者や地域の皆様にご感謝申し上げます。